

「京都文教大学海外出張助成金」交付による海外出張報告書（1頁）

2011年1月14日提出

申請年度	2010年度（平成22年度）		
所属学科	臨床心理学科	報告者・職氏名	准教授 松田 真理子
海外出張内容 (種別に)	<p>目的 オランダのアムステルダムで開催された IEPA (The International Early Psychosis Association Inc) 国際早期精神病学会第7回大会でのポスター発表、ならびにドイツのフランクフルトでハインリッヒ・ホフマン協会、シュトルーヴェルペーター博物館に立ち寄り、精神科医ホフマンの作成した絵本や執筆論文の収集活動を行った。</p> <p>訪問国・地域 オランダ(アムステルダム)、ドイツ(フランクフルト)</p> <p>助成額 235,000円</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">学 会</span></li> <li>( <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">発表有</span> )</li> <li>・ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">調 査</span></li> <li>・ 会 議</li> <li>・ セミナー</li> </ul>
期 間	2010年11月27日(土)～2010年12月5日(日)		7泊9日
上記出張期間 の研究・調査 等活動経過	11月27日・・移動日(中部国際空港 11:40発 LH737便 アムステルダム着 19:00)		
	11月28日・・学会会場下見およびポスター発表リハーサル		
	11月29日・・国際早期精神病学会第7回大会 ポスター発表 於RAI Congress Center		
	11月30日・・国際早期精神病学会第7回大会 ポスター発表 於RAI Congress Center		
	12月1日・・国際早期精神病学会第7回大会 ポスター発表 於RAI Congress Center		
	移動日(アムステルダム 18:20発 KLM1773便 フランクフルト着19:30)		
	12月2日・・ハインリッヒ・ホフマン協会にて文献調査・収集		
	12月3日・・シュトルーヴェルペーター博物館にて文献調査・収集		
	12月4日・・移動日(フランクフルト 14:20発 LH740便 関西国際空港)		
12月5日・・関西国際空港着(9:35)			
研究・調査 発表等概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ オランダのアムステルダムで開催された第7回国際早期精神病学会で聖隷浜松病院の生田先生と共に「Effectiveness of psychotherapy for At Risk Mental State(ARMS) in preventing full blown psychosis –through the view point of impulse-control and cognitive function」というテーマでポスター発表した。</li> <li>・ ドイツのフランクフルトでは、約150年前に活躍した精神科医であるハインリッヒ・ホフマンに関する資料を収集するため、ハインリッヒ・ホフマン協会、ならびにシュトルーヴェルペーター博物館に立ち寄り、ホフマンの作成した絵本や執筆論文を収集した。</li> <li>・ オランダのアムステルダムで2010年11月29日～12月1日に開催された第7回国際早期精神病学会で、「Effectiveness of psychotherapy for At Risk Mental State (ARMS) in preventing full blown psychosis through the view point of impulse-control and cognitive function」のタイトルでポスター発表を行った。筆者は私立高等学校のスクールカウンセラーとして経験の中から、一過性の精神症状ではなく、統合失調症やうつ病を顕在発症し困難な人生を歩むことになる生徒や家族の深い苦悩を見るにつけ、前駆期のうちに適切な対応をし、顕在発症を予防する必要性と重要性を強く感じるに至った。本論ではアットリスク精神状態群の精神病顕在発症を予防するための臨床心理学的面接法をスクールカウンセラー先での自験例2例(事例A:15歳 男性、事例B:15歳 男性)に基づき、後方視的に検討し、病前性格、未治療期間(DUP)、家族関係、友人関係、ひきこもり、発達</li> </ul>		

「京都文教大学海外出張助成金」交付による海外出張報告書（2頁）

2011年1月14日提出

<p>研究・調査 発表等概要</p>	<p>障害の側面からその異同を考察した。なお、各事例に施行したロールシャッハテストからは衝動統制の検討を、WISC- の結果から言語性 IQ(Verbal IQ)と動作性 IQ(Performance IQ)についての検討を行った。</p> <p>・本研究における2症例は両者とも母親が長年に亘る精神科通院歴があるため、子どもが精神科受診することに対する偏見・拒否反応はないが、A本人は継続治療の必要性を認識しておらず1回のみを受診で精神科通院は中断となり、Bは注察妄想や幻聴様体験があるにも拘わらず精神科受診を拒み続け、A、Bともにスクールカウンセラーとのカウンセリングのみを継続中である。よって、精神科受診に対する家族の理解のみならず、本人の受診・継続治療に対する理解を促し DUP を短縮することが重要である。さらに本人の病前性格を吟味し、他者への共感能力、衝動統制の力を培うことによって対人コミュニケーション能力の改善をはかること、親の心理教育の一環として、ひきこもりが心的エネルギーを充電する時期となる建設的側面があることへの理解を促すこと、親自身の精神疾患や両親の不和による機能不全家族の家族内力動の調整なども精神病顕在発症を予防する心理療法の課題として挙げられる。</p>
<p>研究・調査 発表等々の 成果の概要</p>	<p>第7回国際早期精神病学会でポスター発表した ARMS の顕在発症予防に関する心理療法の観点の一つとして認知的側面や病前性格に着目し、衝動統制を身につけることの大切さが確認された。</p> <p>150年前に活躍した小児精神科医のハインリッヒ・ホフマンが当時から着目していた多動を中心とする発達障害や拒食症などの子どもの様相を、資料調査によって確認することができた。</p> <p>2010年12月11日に東京で開催された第14回 日本精神保健・予防学会では「未治療期間はどのように長くなるのか：DUPの短縮へ向けて」のシンポジストとして「学校現場における医療機関との連携の現状 スクールカウンセラーの立場から」という演題名で発表した。</p> <p>精神病顕在発症を予防するための早期介入の推進のためには精神病未治療期間 (duration of untreated psychosis : DUP)の影響が諸研究により注目されている。</p> <p>Harrison, G.ら(2001)は統合失調症における脳の器質性変化は前駆期あるいは精神病状態の極めて初期において著しく、2~5年後には安定してくるとし、Birchwoodら(1997)は発症後の早期段階での治療こそ重要であり、3年以内の介入が治療の有効性が高いことを指摘している。筆者は未治療期間が長くなる要因と、DUP短縮のための工夫点をスクールカウンセラーとして面接を行った3事例(事例A:女性15歳、事例B:女性16歳、事例C:男性15歳)を通して、精神科受診に対する本人と両親、関係各者の捉え方、治療意欲と医療機関との協力関係、DUPを短縮するための工夫点を、統合失調症、うつ病、適応障害、発達障害の各疾患名に対する世間一般の認識の在り方や偏見、受診に対するスティグマという観点も交えて検討した。</p> <p>なお、筆者は2010年10月7日に第33回日本精神病理・精神療学会で聖隷浜松病院精神科の生田孝先生と小児精神科医ハインリッヒ・ホフマンがドイツの子どもたちの為に作成した絵本の中に描かれている発達障害に該当する症例について口頭演題発表を行った。今回の出張の際に、ドイツのフランクフルトで収集した精神科医ハインリッヒ・ホフマンに関連する資料をもとに口頭演題発表した内容を論文化し、学会誌に投稿予定である。</p>

「京都文教大学海外出張助成金」交付による海外出張報告書（3頁）

2011年1月14日提出

研究・調査 等の成果 発表予定	シンポジウム・公開講演会等の開催： ・ 第14回 日本精神保健・予防学会のシンポジウム「未治療期間はどのように長くなるのか：DUPの短縮へ向けて」において、「学校現場における医療機関との連携の現状 スクールカウンセラーの立場から」という演題でシンポジストとして発表した。（2010年12月11日 於：東京新霞ヶ関ビル灘尾ホール）
-----------------------	---